

# 雨だぶり。

生きものがその形をうまくとれないときには、

雨さえも髪の毛からしみこんでしまつて身体はどんだぶついでいて、やたらつつかれたり平手で親しくたたかれたりする  
と中身がずいぶん外へ飛び出してしまふ。

かまわずと雨はますますふるし、こわれた雨どいを見上げるとあちこち、かさをささないから、もれて散る雨水にぬれていく、  
自分が雨をたくわえようとしているのか、すごいやなに身体にたまつていくのか、しかし身体の造りそのものは疑えない。む  
くむくらはぎを風呂水でさわる、こんなに水をためこんでるのどうして風呂にまで浸かつてるんだらうと思う。

そうは言つてもりんかく線はやぶれないうえ、身体の中水と外にある水、これは違う水、かの声は雨、身体のは血であるように。  
でも時化になろうものならこの身体だつてあの、ふきまくる水のひとつぶになつて山の、上をいつて下をいつてアスファルト跳ぶ  
のをあそぶ、夜の道アスファルトへ外灯がつくるカナリヤシの影三本線を、いつかかならず絵に描こうと思う。

そのころにはどんな形になるほど水でふくらんでいるのか、すこしの傷からやぶれて水があふれることはないか、自分の髪に一本  
と二本と白髪を見つけてめじるしに、それすらも出口にしてしまいたい。

きのうでも今日でも雨はふつてふつてふつて、たたかれて飛び出した身体の中身も雨水乗つて側溝のひびを垂れていく、飛び出す  
前にも雨、あとにもふつていたし、雨も声の形をとれないで染んでいく。

清水あすか 第5詩集 雨だぶり。

2021.5.31 発行

24編収録 定価 1600円+税

ご購入のご希望はメールでご連絡ください。  
改めてこちらよりご案内させていただきます。

最新刊





空の広場

## 清水あすか

1981年八丈島生まれ、八丈島在住

これまでに詩集

- '07 「頭を残して放られる。」
- '09 「毎日夜を産む。」
- '12 「二本足捧げる。」
- '16 「腕を前に輪にして中を見てごらん。」
- '21 「雨だぶり。」 を刊行。

詩と並行して絵の創作活動も行っている。

絵画個展として、

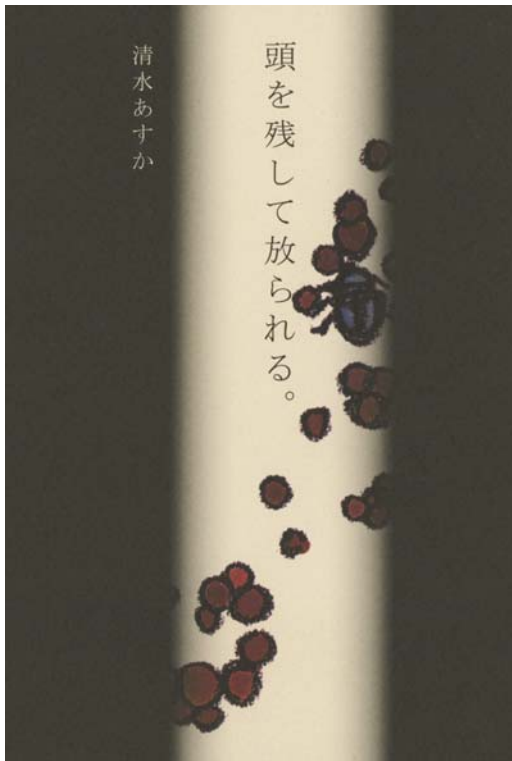
- '12 「まみれる。(CLEAR EDITION&GALLERY)
- '14 「雨を標本する。(BOOK GALLERY POPOTAME)」
- '17 「記憶に列する。(ondo kagurazaka)」

2010年より年3回絵と詩による個人ペーパー、「空の広場 (カラノヒロバ)」を発行中。

「詩と絵を合わせて考え続けることができるように、たくさん失敗をして、それも糧にする試行錯誤」(現代詩手帖 2013年8月号寄稿) の場として、毎号書き下ろしの詩と絵を掲載する。10号ごとに、ジュンク堂池袋本店3階文芸フロアにて原画展(2013年/2017年/2020年)も開催。

清水あすか 第1詩集 頭を残して放られる。

2007.6.16 発行



ママは少し小さくなったので  
わたしは左右にゆれながらちいと大またに歩いて  
だからふだんもまっすぐ  
に歩かない。  
わたしはママのもってる千円札も  
きつとしわしわなんだろうとおもっている。

「そのふくふくとしてやらかいもの。」より

清水あすか 第2詩集 毎日夜を産む。

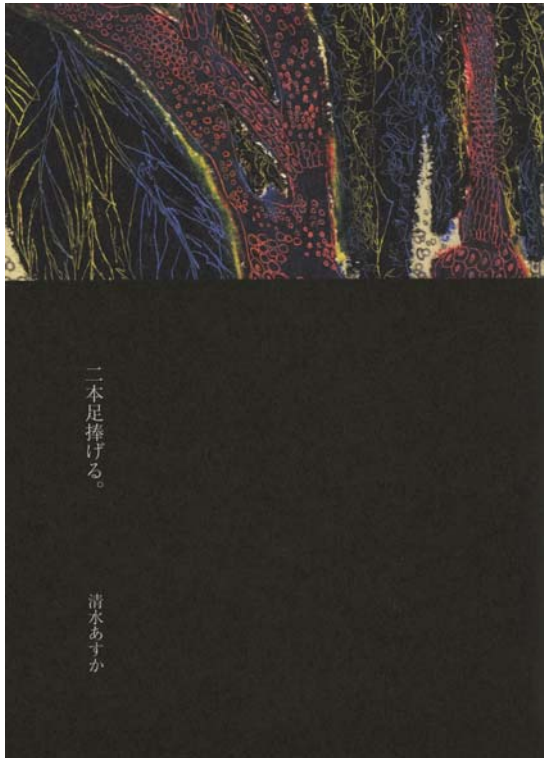
2009.6.25 発行

ひたすらにたまっていく時間のにおい  
さらに沈む、アスファルトから生える体の  
そこから出る色で今も島が育つ。

一を引いても何も減らない  
わたしが在れば、いなくても。

「りんかく線の途中から。」より





チャイコバーバ、  
わらうことがすぐ染んでしまうようなこの心持ち  
とは得たのではない、きっと  
わたしたちはそこから生えてきたのだ。

「明日をしない支度。」より

夜明ける前雨がおびただしく降ったので朝になってもこのさやは雨粒のたっ。落ちる音、  
というより地面を叩くときまわりの音がたっ。  
しなくなるのが、たっ。終わらない。

「右の空豆から降る雨。」より

